
最弱の殺し屋

穩田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱の殺し屋

【Nコード】

N5843H

【作者名】

穩田

【あらすじ】

勝つことに固執する姐さんは《殺し屋》の中では誰よりも弱かった。「ちゃんと生き延びな」「はいよ」姐さんは実戦では最強の2番手は姐さんの隣にいただけで幸せだった。しかしそんな幸せは続かない。狂った殺し屋が見つけたのは幸福のカタチ。それは生暖かい恋慕だった。

序章

「見せかけのプラトニックは見透かされてしまう。偽善も隠された優越感も、いつかは剥き出しになる。きっとそれが怖くて人は、嘘を吐き続ける。自分に嘘を他人にも嘘を。嘘は広がり、嘘は真実になる。取り返そうと思った瞬間、その人の敗けが決まる。人生は勝つか敗けるかの一発勝負。逃げたやつは途中棄権と見なされる。無様な最期を飾りたくないなら醜く戦え。何を押し退けてでもしがみついて勝利を掴め。それが人の生きる道だ」

そう言つて、私の《師匠》は淡く微笑んだ。強欲非道と呼ばれた《師匠》。

その風評通り、彼女は肥大な欲と人道を逸脱した行為のために死んだ。彼女の弟子たちに遺されたのは《師匠》に教え込まれた悪癖と仲間だけ。それと、大量の依頼書。キャンセルは不可。1番早い依頼決行は明日の午後3時。

「泣くな、2番手」

《師匠》の1番弟子は泣き虫の2番弟子の頭を叩いた。

「《師匠》亡き今、これからは下剋上だ。泣いてばかりいたら首を取られるぞ」

ピタリと泣き止む2番弟子。グズグズと涙は引き摺っているが、これでとりあえずは大丈夫だ。

1番弟子は《師匠》の亡骸にしがみつく義兄弟たちに向かって声を張り上げた。

「聞いた通りだ！ これからは実力で這い上がる時代だ。下のやつらは兄弟子を倒せ。力があるならその力で頂点まで上ってこい！ 各々遠慮はいらん！ 私の椅子が欲しいやつは直接来い。相手してやる。明日の午後3時までを刻限とする。弱いやつも強いやつもせいぜい足掻け！」

嬉しそうな声での宣言を聞いて、彼らはガラリと目の色を変えた。

いつたい何人生き残るかな。

1番弟子は口角を引き上げる。

楽しくて愉しくて仕方がない。

《師匠》から伝えられたのは殺しの技。仲間同士の戦いは、この暗殺集団の新たな棟梁を決めるために通らなくてはいけない道だった。

「姐さん」

ちっこい2番弟子が袖を引つ張った。

「敗けないでね。ぼくは姐さん以外の人の下につくつもりはないよ」

「私も2番手が下にいないと落ち着かない。ちゃんと生き延びな」

「はいよ」

2番弟子のぴよこぴよこと跳ねる寝癖を撫で、1番弟子は不敵な笑みを浮かべた。

「私を倒してみせるのは誰？」

大振りの刀を片手に、挑んでくる者たちを一振りで薙いでいく。

「弱いねえ。そんなんじゃ、いつまで経っても『負け』のまんまだよ！」

「姐さん、遊びすぎだよ……」

呆れた声で2番弟子は呟くが、耳の良い1番弟子は聞こえないフリをした。

1番弟子の足元には既に死体の山。老若男女さまざまな体格の人間の死を台にして、1番弟子は高らかに言う。

「私を蹴落とすことができなきゃ、生き残って殺しの仕事に出たって役立たずだよ！」

そう。彼女はこの中では最弱。だが、敗けない。

いくら戦いを仕掛けようと勝てる者がいない。

最弱の王者、《師匠》の1番弟子である彼女は吼えた。

「弱いならさっさと死んじまいな！」

「無茶苦茶だよ、姐さん……」

2番弟子の呟きは今度も完璧に無視された。

一章

紺のブレザー、真っ白なブラウス、緑のネクタイ、黒のハイソックス、黒光りするローファー。

長い髪はポニーテールにして、可愛くアレンジした指定鞆を持った1年の女の子。名前は城岬初華^{しろみさめづいか}。首にマフラーを巻き、ちょこちょことした歩き方で校門を通り過ぎる彼女。なんて……なんて、

「可愛いんだ……」

風紀委員でありながら服装点検なんかそっちのけ。一心に見つめるのは同じクラスのある子の後ろ姿。津々歩^{つづあゆむ}、13歳。独身爆走中の中学1年生。

今日も元気にストーカーしてます。

「歩」

「何すか？」

「今日の部活、休みだって。それと顔が気持ち悪い」

「先輩ほどじゃないっすよ」

殴られた。

「何するんすか」

「うっ」

へらへらと笑いながら歩は先輩の腹を殴り返した。

蹲る先輩^{つひく先輩}。ざまあみる。

ワックスで固めた見事な鶏冠^{ていこう}をお持ちの先輩は地面に伏せて土下座をしている。どうやらばくに完敗の意を示しているらしい。それはとても的確な判断だ。自分の実力を知るのも大切なことだとぼくは思う。

「いやだな、先輩。跪^{つひく}かないでくださいよ。先輩がぼくよりヘタレなのは、明らかに先輩の責任なんですから」

肩をポンと叩くと恨みがましい目で見られた。なぜか怒っているみ

たいだ。

きつと先輩のことだから今朝の朝食の目玉焼きが半熟じゃなかったことで怒ってるんだろう。困った人だ。

ちなみ先輩 津々つしまね優はぼくの兄貴だったりする。そこんところよろしく。

「それで部活って何？ ぼくは一切の部活に加入してないんだけど」
胸倉を掴んで訊くと、

「バスケのピンチヒッター役。でも今日の試合なくなったから休みだって」

兄貴は平然と答えやがった。兄貴には考えもせず、すぐに安請け合いしてしまうという悪い癖がある。大方今回も千円で取引してきたのだろう。

「ぼくは聞いてないよ？」

「言っていないし」

軟派野郎の兄貴に体力は皆無だ。バスケのピンチヒッターなんかで
きるはずがない。それは誰もが承知している。

つまり、また勝手にぼくの名前を使って金を稼いできたということだ。

「うげっ」

アッパーしてみた。地に倒れ伏す兄貴。

「しゃくれてしまえ」

「おまつ」

まつたく……こちらガキの相手をしてる場合じゃないんだ。早く
しないと初華さんに追いつけないじゃないか。

リュックを背負って昇降口へと急ぐ。

後ろから走って行って「おはよう、初華さん」と言うのがぼくの日課だ。そして初華さんはゆっくりと振り向き、極上の笑みでこう言うんだ。

「おはよう。新山くん」っとね。

……うん。言いたいことはわかっている。確認しておくが、ぼくの名

前は津々歩だ。

細かく説明すると、彼女のスマイルをゲットするのはぼくじゃない。ぼくの隣の隣の隣の席の新山淳史だ。

むなしくはないかって？ 何を言ってるんだ。寂しくなんかないさ。妄想も慣れるとなかなか乙なもんだよ？

それにぼくにも後ろから話しかけてくれるキュートな

「よう。歩」

んぞ欠片もない男がいる。

「おう。はよ。おまえが学校に来るなんて珍しいな」

たまに学校にやって来ては騒ぎを起こして揚々と帰る男、お調子者の皆見といえは1年3組の皆見介みなみかいのことであった。

津々歩の昔からのオトモダチ。

……昔の、オトモダチ。

「懐かしいね。きみと友達だったのがつい最近のことのように感じるよ」

「待て待て待て！ 現在進行形の友達だろ！？」

「近づかないでよ。きみと一緒にいるとぼくまでツッコミが下手だと思われるじゃないか」

「そつち！？」

ガビーンと打ちひしがれる男子生徒1名。まあ、5分の1は冗談だ。

「そんで？ 今日は何しに来たの？ またカツアゲ？」

「んなことしねーよ。真面目に勉強しに来たんです」

「……………」

トラブルメーカーくんがほざいてくれやがる。

「生意気なやつだ。そんなんだから朝っぱらから愛猫に引っ掻かれるんだ」

介は仰け反った。

「何で知ってたんだよ」

「顔を見りゃわかる」

頬に引っ掻き傷をこしらえといて、知ってるも何もないだろうに。

つくづくバカだ。

「そんな馬鹿に天才なぼくが1つ、良いことを教えてやるう」

「何だよ」

ニヤリとする歩。

「朝のホームルームはもう、始まっている」

「……まじ？」

「マジ」

ぼくは遠ざかっていく親友の背中を穏やかな気持ちで見送った。

真面目に勉強するつもりなら遅刻なんてしてはいけない。ぼくのおかげで彼は1つ大切なことを学んだことだろう。うん。良いことをした。

実は意外なことに城岬初華は遅刻魔だったりする。だからそれを待っているぼくも必然的に遅刻になるのであった。

……恋は盲目という言葉はまさに、ぼくのためにあると思う。

急ぎもせず、余裕綽々で下駄箱に行き、靴を入れる。その際にヒラリと落ちる1枚の紙。このところ毎日入っている。ラブレターだ。

……冗談です。ただの怪文書です。

『サンジ ニ オクジョウ ニ コイ』

サン、ジニ、オクジョ、ウニ、コイ。

要約すると『太陽のように美しいジニーを置きます。ウニ来い』ということだろう。

残念ながらジニーという知り合いはいないし、ぼくは寿司屋でもない。よって、この手紙は宛先を間違えて入っているってことだ。ぼくには関係ない。

謎の怪文書を戯れに介の下駄箱に入れ、途中で寄り道したりしながら軽い足取りで階段を登っていく。

今日は数学の授業がある。すなわち睡眠時間が1時間は延びたのと同義だ。今日のぼくは完全なるラッキーボーイ。

2階の1番端の教室のドアを勢い良く開け、「はろう」と言いながら入った。

「ハロー、ミスター歩」

先生が軽く睨みながら答えてくれた。

変な人だ。わざわざ英語で挨拶しなくてもいいと思う。

「早く席に座りなさい」

「はいよ」

クラス中の生徒たちが珍獣を見る目でぼくを見ているが、大して気にしない。確かにぼくは珍獣と同じような扱いを受けるに相応しいことをしているからだ。時刻はもう4時限目の終わる時間。遅刻にしても遅すぎず。寄り道したのが思わぬタイムロスだった。

席につき、筆箱を取り出すと机に伏せる。

これよりスリープタイムだ。邪魔するやつは消しゴムのカスを投げてやる。

「おい……おい！」

「なんだよチビ」

なんと。栄えある消しカスの第1犠牲者は皆見介だった。

「チビはおまえだ。ふざけてないで話聞けよ」

「やだよ。英語は嫌いなんだ」

ユサユサと肩を揺らしてくる隣の席の介を振り払うと舌打ちされた。「違つて。おれの話聞いて言つてんだよ。面白いネタがあるんだつてば」

「ますます嫌だよ。毎回オチのない小嘸こはなしを聞かされるこつちの身にもなつてよ。危うくコンパスを刺したくなるんだから」

オチのない小嘸　芯が入ってないシャープペンより価値がないつてことだ。

「つまりバスの窓は開けるためにあるのか閉めるためにあるのかなんて言うきみのどうでもいい話は、どうでもいいって言ってるんだよ」

「そんなこと言ったこともねえよ」

「あ。先生」

その瞬間、介はすぐに姿勢良く座り直した。

「嘘だぴよん」

「てめ……ふざけんな」

先生なら遙か後方で教科書を読みながら歩き回っている。動物園のゴリラみたいだ。

そしてこいつはバカが付くほどの正直者。いつそ正直者を抜いてみたら事実になく近くなると思う。

歩は自分の机を介の机に近づけた。

「続きは？」

「あ？ ……ああ。結局聞いてくださるんすね」

「特別にな」

あと5分で授業終了だ。それまでこいつの下らない話でも聞いて暇潰しすることにしよう。

「実はな……死んだんだつてよ。2年生の女子が」

「……………どこが面白いんだよ」

不謹慎だ。それに今は冬だ。怪談話なら夏にしる。

「いや、マジなんだつてば。昨日、屋上から飛び降りたらしくて、警察がいっぱいいる。教室に来る間に見なかったか？」

「……………見たよ」

歩はブスツとした顔で答えた。

ただ見るどころか、追いかけてこまでしてきた。

たまたま警官の中に知り合いがいたから、からかってやろうとしたのが間違いだった。

「やあやあ。お巡りさんたち何してんの？」

「歩！？」

「よっ、兄貴。元気？」

「ああ、うん。元気。ここ、歩の学校？」

「そーです。つか知つとけよ」

みたいに最初は和やかなごだったんだけど、

「兄貴。お巡りさんに見えないね。コスプレしてる人みたいだよ。」

3年も経つのに未だに制服に着せてもらってるみたいだ。ダサあー」

『歩……ちよい面貸せや』という流れになつてしまつた。ぼくには3人の兄貴がいる。

1人は中学生。1人は警察官。1人は死んだ。そして今回、1番上の、警官の兄貴にボコられてきた。

『次に似たようなこと言つたら、ただじゃ済まさんからな?』といふ捨て台詞を残してヤツは職務に戻つた。

『弟の通つてる学校くらい覚えとけクソ兄貴』

颯爽と歩き去る兄貴。ぼくの呟きは無視された。

ナメんな畜生。

「まさか秋良さんと鉢合わせしたのか?」

「そーですよ」

「それでもつて怒らせてきたと」

「よくわかつてんじゃん」

ム力つくくらい、よくわかつている。いつもは温厚親切な兄貴だが、怒ると怖い。例えるなら般若だ、ありや。

「そういう事件の話ならお断りだ。間に合つてる」

「まあまあ聞けつて。自殺じゃなくて他殺だぞ? 興味引かれねえか?」

「おまえのそういう所がぼくは嫌いなんだ。人の死を軽率に扱つような人間は腐つてる」

「おれは腐女子じゃねーぞ?」

……婦女子?

「おまえが女子だつたら、ぼくはさしずめ宇宙人だ」

「……おまえ……汚れがなくていいな」

「当たり前だ。介と違つてぼくは風呂に入つてるからな」

「おれだつて入つとるわ!」

「嘘つけ」

なんて汚ならしいやつなんだ。もうこいつの家に行くのは御免だ。ぼくまで汚れてしまう。

「おまえつてやつはさ……友達を貶めるのが好きだよ……。見て

みるよ。この冷めた空気。おれの好感度は底辺に落ちたよ」

「違うね。ただ底辺から最低に落ちただけのことだよ」

「おまえ最低だな！」

ぼくらが授業中に騒ぐのはいつものことだから、みんな適度に流してくれるが、今日はおもいつきり視線を集めていた。

ぼくにはわかる。後ろに誰が立っているかが。

不穏な気配を読み取った介はゆっくりと振り向いた。

歩は『ジャンボ』と言うときのポーズで右手を挙げる。

「やあ」

「せんせー……」

そう言つて、介は使用不可能になってしまった。

まあいい。今からきみはヘタレ男に昇格だ。

「きみらはいつたいぜんたい何歳なのかな。小学生かい？」

あーあ……ブチ切れてる。

こうなつたらもうホールドアップするしかないかな。

でも降伏するのも嫌だしなあ……。

ここは親友に丸投げすることにしよう。

「ぼくは中学生ですけど介は胎児です」

「ふざけんな！ 裏切りやがったな！？ 昨日のアレをバラすぞ」

うにやつつ」

介は椅子から転げ落ちた。

なに。大したことじゃない。

羽虫が飛び回っているようだったから叩き落としてやっただけだ。

冬だというのに元気な虫だ。一度瀕死ひんしにしておく必要があると常々

思っていた。

「あとで2人とも職員室に来るように」

「へいよ」

「歩のせいだ歩のせいだ歩のせいだ歩のせいだ歩のせいだ……」

ちょうどチャイムが鳴ったので先生はさっさと出ていった。

ぼくは肩を落とす介に気合いを入れる。

「エロ本を万引きして、それを初恋の相手に見られたときより、まだマシだと思わない？」

我ながら良い例えだと思ったのだが、

「万引きなんかしねーよ!!!」
怒鳴られてしまった。

二章 (1)

2番手は泣き虫だね。

1番弟子はその子供を見てそう言った。

こんなんで使い物になるの？とも。

《師匠》が1番弟子のことを「姐さん」と呼ぶから2番弟子も同じように呼ぶようになった。

昔、2番弟子は姐さんとこんな話をしたことがある。

「姐さんは練習だと弱いけど、実戦だと強いね」

「当たり前だよ。練習で強くて実戦で弱い未熟者になりたくないからね」

「……それは実戦でへマしたことへのあてつけ？」

「うん。私、弱い男は嫌い」

「姐さんは容赦って言葉を知らないの？」

「Sってという言葉なら知ってるよ」

ニヤリとする姐さんは最悪の人間だった。

でもまだ姐さんのほうが人間なだけマシだ。《師匠》はもう人間の域を出ていた。

人の恨みは喜んで買ってくるし、殺し合いは日常茶飯事。拷問室を地下に造って、ウキウキと外に人を狩りに行くような人だった。もはや殺し屋じゃない。

人を喰う女 《喰居》^{はみい}。本名の犬居加絵ともじった渾名^{あだな}が付いていた。はつきり言ってダサイ。だからついふざけて「ハニー」と呼んだら腕をもぎ取られそうになった。

あるうことが随分と気に入っているらしかった。姐さんが助けくれなかったら、拷問室行きだっただろう。

「殺し屋は恨みを買う仕事だよ」

それが《師匠》の口癖だった。2番弟子の後から入ってきた新参者が裏切り者だったときも、そんなことを嘯^{うぶ}いて笑っていた。

能天気な《師匠》は裏切り者^{そいつ}を殺した。少しだけ寂しそうな笑顔で、殺し屋なんかを稼業にしていなかったなら、きっと《師匠》は幸せになれた。

それを見学させられていた2番弟子は無感動にそう思った。

『逃げるなよ。逃げたらそこで<ruby><rb>終いだ』

</rb><rp>(</rp><rt>師匠</rt><rp>)</rp></ruby>は自分で自分を律し、甘えを許さなかった。本当は殺し屋になんかになるべき人じゃなかった。《師匠》は優しく嘘つきでどうしようもなく寂しがり屋な、ただの女の子だった。

1番弟子とそんなに歳も違わないはずなのに、1番苦しい道を彼女は彼女自身で選んだ。

『生きる。姐さん、2番弟子』

《師匠》は 口の端から血を流し、にひつ、と最後の最期に最高の笑みを見せた。

殺意と失意。その両方を兼ね備えた彼女は、嬉しそうに死んだ。それからだ。姐さんの凶行が始まったのは。

「さあて。生き残った皆さん、お疲れさん。2番手は生きてる？」
1番弟子は屍の山上で胡座^{まぐら}をかきながら、生き残った連中に声をかけた。

2番弟子は最後に仕留めた男から斧を引き抜いて手を挙げる。

「ふあゝい。生きてます」

「どうした？ 眠いのか？」

苦しそくに顔を歪める2番弟子。

「刺された……かも」

「じゃあ死ね」

即答された。

「ひどい……。そこは心配するところでしょう？」

「2番手は嘘が下手だからすぐにわかる」

「……さようですか」

つまんねー女だ。

「目にピースするよ？」

「遠慮しときます」

姐さんの目潰しは脳味噌まで破壊するから嫌だ。

仕込み刀が上着の袖の所に入っていて、指を突き出すとそれが飛び出る仕組みだ。

邪魔じゃないんだろうか。間違つて自分に刺したらそれこそ洒落になれない。それにそんなことしなくとも、素手のほうが姐さんは強いから滅多に使うことはない。まったくの無駄だ。目潰しの為だけの装備だとも言える。

「生きてるやつはここに集合しな」

話してる間に死体で椅子を作った1番弟子は手招きをする。

そそくさと斧を手提げ鞆の中に入れ、元7番弟子で作られた背凭せもたれに寄りかかる1番弟子を真下から見上げた。

「ねーえさんっ。おれ生きてるうぐふっ」

びよんびよんとノミのように跳ねる5番弟子の顔面を2番弟子は裏拳で叩いた。

「何すんだ！」

「姐さんはおまえのこと嫌いだったさ」

「姐さんは何も言つてないじゃないか！」

「ええ。嫌いよ。5番手は弱いもん」

「姐さあん……」

情けない声の5番弟子の腹を蹴り飛ばし、2番弟子は他にもぞろぞろと集まってきたやつらを見回した。

「1番手、2番手、5番手、6番手、10番手、11番手、15番

手、20番手、22番手、28番手、33番手、56番手、82番

手。13人しか残らなかつたの？ そういえば3番手と42番手は？」

「出張です」

3番弟子が答えた。1番弟子は少し不満そうな顔をする。

「ふーん……そっか。出張だったのか……困ったな……対象者だったのに」

「その、対象者っていうのなんですか？」

5番弟子の問いかけに1番弟子は小首を傾げる。

「うん？ いいのいいの。気にしないで」

「そっだ。バカは知らないままでいい」

「何様だオメーはっ」

「お子様の俺様だ」

2番弟子は胸を張った。

「その2つを組み合わせるな！」

「にやんで？ オイラは良いと思うよ？」

「8番手は黙ってな。男同士の戦いに無粋な手出しは無用だよ」

落ち込む8番弟子。ナイス、姐さん。

姐さんのお許しが出たところで、2番弟子は1度は仕舞った斧を出した。

「金の斧と銀の斧、どっちがいい？」

5番弟子は即答する。

「普通の斧」

「む……」

へソが曲がった5番弟子らしい答え方だ。

2番弟子は苦虫を潰したような顔をした。

「2番手の敗けだね」と、1番弟子は頬杖をつきながら片頬でニヤける。

「人の敗北を心から喜ばないだよ」

「だって『金の斧』って答えたら斬首で『銀の斧』って答えたらメッタ斬りでしょう？」

「そっです」

「それで『普通の斧』だと見逃さないといけないっていう誓いを立

てた。だから5番手の勝ち」

「解説をどうも」

《師匠》と姐さんしか知らない秘密だったのに見事にバラされた。不貞腐れたままの2番弟子を鼻で笑って、1番弟子は言う。

「3時から《仕事》がある。1番から22番までは強制参加。それ以降は……ついてきたければ来な」

相変わらずやる気のない様子で、死体の手と握手する1番弟子。ケタケタ笑って「冷たい」とはしゃぐ。

その手の主が誰かということに気づいた2番弟子は顔を背けた。真っ赤なマニキュアを付けた女の手には見覚えがあつた。

1番弟子はヒールでその手を踏みにじる。

「姐さん……それ4番弟子の手ですけど……」

その行為に耐えきれなくなり、おずおずと小太りの中年男 20番弟子が進言すると、1番弟子は緩慢な動作で彼を振り向いた。

その顔が無表情で何の感情も映さないことに誰もが嫌な汗が出るのを感じた。

「だから何？ あなたも殺されたいの？」

蛇に睨まれた蛙の如く、20番弟子は一切の動きを止めた。

2番弟子は内心で溜息をついていた。

姐さんは負け犬に容赦はしない。《師匠》がいた頃は弟子の<ruby>つが</ruby>by><rb>折檻は</rb><rp></rp></ruby>自ら名乗り出て

匠</rt><rp></rp></rt><rp></rp></ruby>自ら名乗り出ていたから、姐さんの残虐性を知る者は少ない。実戦に出たことがなく、見た目で判断する者なら尚更 外見だけならどこにでもいる女の子なのだから、1番弟子は戦闘要員ではないのだと勘違いするのも仕方がない。

弟子の前に付く番号は弟子入りした順だ。だから番号が早いからといって実力が上というわけではないし、遅いからといって弱いわけでもない。ただし《師匠》は酔狂な人だったので10番弟子より下の弟子は本番に使わなかった。

当然、10番以降は実戦でしか本領を発揮できない1番弟子の強さも知らないというわけだった。1番弟子は元4番弟子だった女を死体の山から力づくで引っ張り出し、頂上から蹴落とした。虚ろな目と20番弟子の目が合う。

1番弟子は立ち上がった。

「こいつは弱いから死んだの。足手まといになるから殺されたの。わかるでしょう？ 役立たずはもう、この《巳巳巳巳》には必要ない。新しい殺し屋が必要なの」

「ですがなにも仲間を」

「死んだやつは仲間じゃない。ただの敗者よ。人間として扱ってもらえるなんて考えるほうが厚かましい。優しくしてほしいなら2番手のように優秀じゃないとね」

1番弟子は目の前で赤い顔をする2番弟子に微笑んだ。

「2番手のように 空っぽの人間じゃないと」

「……姐さん？」

笑みを崩さない1番弟子。そこに何かを感じ取った2番弟子は黙った。

1番弟子は両手を広げる。

「みんなが納得したところで、そろそろ出かけようか」

そして姐さんは嬉々として笑うのだった。

「新装《巳巳巳巳》の営業開始だ」

「歩……」

約束通り職員室に行った帰り、妙にテンションが低い介を引き摺りながら、ぼくは階段を昇っていた。

介のせいでぼくまで先生に呼び出されるのは不服だったが、暇だったのでついて行ってやったのだ。それを見た先生は「おまえたちの友情には感動した。表彰状をやるう」と涙を流しながら意味不明なことを言っ**て**ぼくを困らせた。

しかし寛大なぼくは許してやることにした。大人とは時に変な言動を取る**こ**がある。きっとぼくが偉大すぎて畏縮**いしゆく**しているの**だ**らう。そして「苦しゆうない、面を上げい」と言い返したらなぜだか怒られた。それはぼくが「おまえたちは何で授業をまともに受けられ**な**いんだ」という言葉を「おまえたちの友情には感動した。表彰状をやるう」と聞き間違えた故の所業ではない。今日の先生は疲れて**い**ただけだ。

「何だ？ 悩みなら聞いてやる。ぼくらは親友だから**な**。だがその前にぼくの要望を聞いてくれ 軽々しく触る**な**」

介の馴れ馴れしい呼び掛けに答えると、
「自主的に触**つ**てるのはおまえだ。……どうしよう。おれは退学させられるかもしれない……」と愉快なことを言われた。

「やめればいいじゃん。そしたらぼくもやめてやるよ、おまえの家の壁に落書きするの」

「おまえだったのかよー！」

「落書きされてたのかよ」

ぼくはそっちのほう**が**ビツクリだ。適当に言っただけなのに当たっ**て**しまうとはぼくは天才だ。

やっぱりイマイチのツツコミに苛々**いひひ**しつつ、歩は踊り場で一旦休憩することに**し**た。

腰を下ろし、ポケットからケータイを出してメールを返信する。

「あーゆーむー！」

「……………」

チラリと視線を上げると、そこでは介が床と同化していた。気持ち悪いので無視することにした。

「シカトすんなよ早くしろよ。部活に遅れちまうだろ」

介の声が聞こえる。しかしぼくの周りに人影はない。

「……………幻聴か」

「違うわい！」

ゴロゴロと床を転がってきた介を足で止めて、グリグリと顔に靴の裏を押しつけてやった。介は変態なのでこうすると喜ぶのだ。決して暴力を振るっているわけではない。

「ぐぐぐ……………」

「五月蠅い。喋るな」

「がぐぐ……………」

「『歩は頭いいな。おれも見習いたい』だって？ 何を今更言ってるんだ。ぼくと介じゃ生まれ持ったの才能が違うんだから、生まれる前から見習わないと到底追いつけないよ。つまりもう手遅れってことだね。御愁傷様」

「ががが……………」

「ガだつて？ やめてよ、そんな蝶だか毛虫だかわからないような物体の名称を口にするのは。ぼくはデリケートなんだからね」

「うー」

「『生きててごめんなさい』？ やつと気づいたの？」

歩は深い溜息をついた。

「きみが価値のない人間だということは承知の上だよ。それでもぼくはきみを友達と認めている。それは素晴らしいことだとは思わな
いかい？ 別に平伏しても構わないよ？」

「つぶ。誰がするかドアホ！」

介は顔を上げて暴言を吐いた。なんて無礼なやつなんだ。

「ふざけてないで早くおれを教室まで連れていけ」

「自分で歩けよ。あと13段昇ったところにあるんだから」

「階段の数は12段だぞ？」

「違うよ。12段は学校の階段だろう？　ぼくが言ってるのは13階段のことだよ」

「死刑台！？」

「ぼくに暴言を吐いた罪は重いんだからね」

「重すぎだ！」

身の程知らずなやつだ。

しかたがないので襟首えりくびを掴んで上へと投げてやった。

「うっ」

「あつぶねー」

飛距離が足りなくて落ちてきた。すぐさま避難するべく。

介はほぼ1段目の辺りから丸太のように転がった。

難儀なんぎなやつだ。一々ぼくの手を煩わづらわせないと生きていけないのだろうか。まあ、そこまでぼくを好いているというのなら満更でもない。

遠慮なく下僕として使ってやろう。

歩は端末をしまつて立ち上がった。

休憩は終わりだ。何しろぼくは忙しい。下僕の相手をしている暇などこれっぽっちもないのだ。

「家に帰ったら掃除洗濯、夕飯を作ったら秋良兄貴が帰ってくるまでにトラップを作つとかないと……」

呟つぶやきながら伸ばされた手を引っ張つて介を起こしてやった。

「優さんと共同でか？」

埃ほこりを叩いて落としながら介は訊いた。

歩は眉をひそめる。

今の質問はあまりに的外れだ。

「優兄貴はぼくのトラップを無意識のうちに破壊するという癖があるから、明日の朝まで庭にでも埋めておくよ。蟻ありのエサくらいには役に立つんじゃない？」

「……そんなことしたら死ぬぞ、あの人。体力ないんだから」と、階段を昇る足を止めて振り返る介。

その後ろから昇っていた歩は「止まるな」とその尻を蹴った。

「それもまた人の人生としては華々しいと思う」

「おまえの思考回路は間違いも甚だしいけどな」

「僕に口答えする気？ もう一回蹴るよ？」

「やってみやがれ」

「……やめとくよ。きみの痔じが悪化すると困るでしょう？」

「痔じって何？」

「……。きみは世界一の幸福者しあわせものだね」

会話のレベルが違った。これからはぼくは単細胞生物と話をする気持でコイツと付き合っていかなければならぬらしい。

ぼくはなんて不憫な人間なんだ。いっそ、ぼくも最低まで落ちぶれてしまいたい。……まあ、『痔』が高等な会話で使用されるかどうかは別として。

「邪魔」

「ぐぶっ」

一度目の警告を無視していつまでも立ち塞がる介の背中を蹴り倒し、その上を歩く。

ぼくは忙しいんだと何回言わせりや分かるんだか。使えない下僕だ。

「スタコラサツサー」

スキップで階段を昇りきり、誰もいない廊下をスキップで通る。

何で人っ子1人いないのかというと、今日は4時限目で授業終了だからだ。

つまり今日のぼくは15分くらいしか授業に参加していないということ。楽しみにしていた数学の授業は2時限目だったから、その時刻にはまだぼくは兄貴と鬼ごっこをしていた。

「っ」

楽しげに歩を進めていた歩は急にUターンをした。

そしてそのままダッシュ。階段の途中でへたばっている介の所まで

引き返す。

「介！」

歩は介の身体を揺すった。

「介！ 起きろよ介！」

「なんだよ……おれを見捨てた歩くん」

その必死さに渋々、介は伏せていた顔を上げた。

「介っ、介！」

「うがっ……」

側頭部を蹴られてまた伏せた。

「何すんだテメー……」

「喋るな、そのままの体勢でいろ」と、当の加害者は被害者の耳に囁く。

「あの人^かが来たんだ」

介は首を傾げた。

こんなに慌てている歩を見るのは初めてだった。

「……誰が？」

介のとぼけた質問に歩はブチ切れた。

「城岬初華しろみきついかさんに決まってるだろう！ とにかくきみは倒れていればいいんだ。あとはぼくが何とかする」

「友達をダシに使うなよ」

「あ、来た！」

咄嗟しじつに介は倒れた。

言う通りにしないと後でめんどくさいのだ。

「や、やあ。初華さん」

「こんにちは歩くん。……どうしたの？」

初華さんは倒れている介を見て驚いた顔をした。

どうやら本当に死んでいると勘違いしてくれているらしい。好都合だ。

「わからない……ぼくが来たときにはもうこの状態だったんだ。必死で名前を呼んだんだけど返事がなくて……」

ヨヨヨと泣き崩れるべく。

多少演技過剰かとも思ったが、彼女の次の言葉でそんな不安は消し飛んだ。

「保健室に連れてったほうがいいのかな」

……バカ？ 死亡だって言ってるじゃん。

しかしそんなことはおくびにも出さず、

「いや、たぶん彼はもう……。犯人を探し出すことが敵討かたきうちになると思うんだ。もしよかったら協力してくれない？」と何気なく誘ってみた。

天然な女の子は嫌いじゃない。むしろ好きだ。

「私が？」

まるで『もしよかったらデートしてくれない？』とでも誘うような

文句を囁くと、初華さんは恥ずかしそうに顔を赤くした。
よし。脈ありだ。

どの部分でそう判断したかは不明だが、歩は早々に押しの一手を投じた。

「きみとなら良い関係を築けると思っただ。そう思わないかい？」
「うーん」

初華さんは迷うように目をグルリと愛嬌たつぷりに回した。それだけで歩はノックダウン。この勝負、決まったぜとばかりに心の中でガッツポーズした。

しかし現実はそのなに甘くない。

「ごめんね。歩くんとは無理」
むむむ無、理？

……『歩くんとは無理』……つまりぼく以外ならオーケーだということ？

立ち去る初華さんを呆然と見送る。

「なかなかパンチの効いたセリフを吐いてくださることで……ククク……」

「……何で……？」
もしかや介が死体役だから駄目だったのか……？
先程とは別の意味でノックダウンされた歩は、

「……」
「いつつ」

背中を向けたまま肩で爆笑している親友を踏み潰した。

そのままグリグリと踵で攻撃開始。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い！ ギブ！ 歩サン、ギブです！」
「もう恋なんてしない……絶対にしらない……」

そしてその足を高く振り上げた。
真っ青になる下僕。

暗い笑みを浮かべる主人。

「ぼくを愚弄するなんて100年早いんだよ」

「待て！ 話せば分かる！ やめっ、ぐあああああつー！！」

秘技、かかと落とし。これで介は本当に死んでしまったらしい。軽く痙攣けいれんを起こしている。

歩は優雅に伸びをした。そして深く息を吐いて、清々しい表情をする。

「八つ当たり最高」

まさか初華さんに手を上げるわけにもいくまい。なぜなら彼女は何も悪くないからだ。悪いのはすべて介。正しいのは彼女。

世界はそうやって回っている。ぼくごときが口出しできることじゃない。

「さようなら悪の帝王。ぼくは今から正義の味方のスカートをめくってくるよ」

ぼくは新たな夢に向かって走り出した。生き返った介が後ろで「行ってこい。そして嫌われてこい」と意味不明なことを言っていたような気がしたが、気のせいだろう。

階段を駆け降りて、前方を歩くターゲットの後ろに回った。

右手準備オーケー。速度オーケー。

実行します！

迫るスカート。振り返る彼女。

「最低！」

平手打ちされた。

「そういえば今回のターゲットって誰？」

1番弟子の隣のポジションを勝ち取った2番弟子は、多少の優越感を味わいつつ彼女に訊いた。

《師匠》とその他の死体が積み重なる倉庫から抜け出し、足音も立てずに彼らは人知れず街を闊歩かつぱしていた。

総勢13人の移動。結局、みんなついてきてしまったのだ。

何せ実際に外で仕事をするのは初めてのやつらが多い。《師匠》は許可なしに人を殺すのは禁止していたから、興味もひとしおなのだろう。

1番弟子は足にすりよってきた猫を蹴飛ばして質問に答えた。

「言ってなかった？　今回は3人。14歳の女、15歳の男、20歳の男」

「随分と若いね」

「2人は中学生。20歳のほうは大学生。名前はたしか津々那

智

「……ふーん。変な名前」

その名前に聞き覚えはあるが、言わないほうが身のためだ。

そう思つて2番弟子は曖昧な返事をした。

「2番手はその辺にありそうな名前でも変つて言うよね」と、クスクスと笑つる姐さん。

この人は全てお見通しで乗ってくるのだから心臓に悪い。

こっちはいつ《金の斧と銀の斧》の時のように暴露されるかとハラハラし放しだ。

「そんなことない。あ　そういえば姐さんの本名って何？」

さりげない話題轉換に、もう一度姐さんは笑った。

「変つて言われるから教えない。自力で思い出しな」と、姐さんは意地悪く言う。

2番弟子は、姐さんに素直な答えを期待するほうが間違っている
と即座に切り替えた。まともに相手をしていたら日が暮れてしまう。

「最初は誰から？」

「大学生から」

「……姐さんって性格悪いよね」

「2番手ほどじゃないよ」

やれやれ、と首を振って、2番弟子はおもむろに斧を出した。目だ
けを左右に動かし、「姐さん」と呼ぶ。

「わかつてるよ」

1番弟子も刀を鞘から抜いて溜息をついていた。面倒だという態度
がまるわかりだ。

他の弟子たちは状況が把握できずに狼狽うろたえる者がほとんどだった。

あくびをする1番弟子に2番弟子は忠告する。

「手抜きしないでよ？ これは姐さんの力を見せつけてやる良い機
会なんだからね」

「んー」億劫そうに返事をして、

「襲撃者14名の到着だよ。早く構えな」と、姐さんは言った。

慌てて得物を取り出す弟子たちを1番弟子は軽蔑するように見下し
た。

「死ぬよ、油断してると」

「姐さん、1対1のノルマでいい？」

「そうだね。……あ。2番手は3人ね」

「……楽しようとしてる？」

「ううん。そうじゃなくて、私《仕事》以外だと弱いから負けると
思う」

「ああ、そう」

つまり1番弟子にとって、コレは《仕事》の内に入らないというこ
とだ。

遠足は帰るまでが遠足だが、帰ってからの着替えは遠足の延長では
ないということ。

それに、後始末なら2番弟子の得意分野だった。

「コレは口封じですか？」

5番弟子が小さなナイフを弄びながら1番弟子に訊いた。こいつも突然の訪問客に気づいていたらしい。

音も立てず目の前に降りてきた人影を、5番弟子はついでのように斬る。

そして「おれノルマ達成」とつまらなそうに言った。

「たぶんな。半月前のアレじゃない？」

質問には2番弟子が答えた。

「何でお前が答えるんだよ。おれは姐さんに訊いてるんだ」

「お前ごときに煩わされては姐さんが汚れる」

「おまえと話すとおれの心が荒んでいくように感じるんだけど」

「今更だろ。っ、はい。まず1人目終わり」

話しながら脇の店屋の屋根にいたやつを、5番弟子のナイフを拝借し、それを投擲して落とす。

怒れる5番弟子は死体と一緒に落ちてきた得物を抜いて、そのまま2番弟子に刃を向ける。

「ふざけんなよ！？ 手前の斧みたいに量産できる代物じゃねえんだ、大切に扱え！」

「大切な物ならちゃんと管理しときなよ。それにそれすらできないのは、きみが劣ってる証拠じゃない？ 人のせいにするのはやめてよね」

と、左右の手に交互に斧を持ち変えて更に2人を斬った2番弟子は嘲笑った。

正論だけに5番弟子は何も言い返せない。

ノルマを達成した2番弟子は、ぼけーと立っている1番弟子の傍に寄る。

「あのときの依頼主、殺しておきますか？」

「うん。下から数えた5人は写真あげるから行ってきて」

「写真だけですか？ オイラには無理です、そんな芸当」

82番弟子が抗議するが、1番弟子に睨まれて目を泳がせた。
「行け」

その一言で82番弟子を含む5人は慌てて走り去る。
これで人数は8人に減った。

「5人もいらなくない？」

「13人もいらないでしょ？」

「どつちに？」

2番弟子の意味ありげな問いに姐さんはケラケラと笑って答えた。

「両方にだよ」

そしてまた先頭をきつて歩き出す。

2番弟子は遅れないように小走りで追った。

「それとも自分が向こうに行きたかった？」

1番弟子が首を回らせて後ろを歩く2番弟子に訊く。

「別に。……姐さんって、ひねくれてるよね」

2番弟子は迷惑そうだった。

「2番弟子よりはね」

だが姐さんはとても楽しそうだった。

「本当に……、最低だ」

2番弟子の小さな呟きは、またいつものように無視された。

三章 (1) - 2

津々那智^{なち} 母親を早くに亡くし、今は父親と兄弟との5人で暮らしている大学生。

津々那智には兄が1人、弟が2人がいる。長男は津々秋良^{あきら}。三男、津々優^{ゆう}。四男、津々歩^{あゆむ}。年は上から26、20、15、13の順だ。容姿はそこそこ、頭の出来もそこそこ。特筆すべき所は何一つなく、面白味のない男であった。

今日、那智はバイト先から帰宅する途中で猫を拾った。段ボールの中で哀れを誘うようにか細く鳴いているのを見て、一瞬迷ったが手を伸ばしてしまったのだ。

どうやら雑種らしいその猫を大事そうに抱え、口元に微笑みを浮かべた様子は端^{はた}から見れば不審者だったが、あいにく周りには人つ子1人いなかった。まだ陽^ひの高い時間帯だというのに寂しいもんだと過疎化が進んだ街を哀れみつつ赤信号が変わるのを待つ。

その際にも車は一台も通らない。それでも律儀に青を待つのは那智の性格をよく表していた。ようやく青になったので速足^{はやあし}で横断歩道を渡る。そして渡り終わってからも那智はそのまま走った。

弟たちに見せたらきつと喜ぶだろうなあと思うと自然と頬^ほが緩^{ゆる}んだ。2人の弟とは半分しか血が繋がっていないが、年が離れているので滅多に家にはいない父親の代わりとして弟たちに接してきた。

1番下の弟はどうやら反抗期のようなだが、可愛い生き物を見たらトゲトゲした心も癒^{いや}されるだろう。

久しぶりに笑う顔が見られるかもしれない。そう考えたら走らずにはいられなかった。

那智は通りの角を右に曲がる。あと50mほどの所に我が家があった。

「津々那智で合ってます?」

「え。あ、……」

そこまで来て　その少女はいきなり現れた。

髪型は赤みがかかった色のボブで色黒の小さな女の子。小学生くらいの年に見えるその子は、錆びた包丁を片手に持っていた。

「そんな物を持ってたら危ないよ」

子どもが好きな彼は一瞬驚いたが、すぐにしゃがんで注意をした。初めに浮かんだ、なぜ自分の名前を知っているのかという疑問をすっかり忘れ、少女と視線を合わせる。

彼はどんな相手とも対等であることを望んだ。それは実に真っ直ぐで他人からは好かれる質だったが、今回の相手は違った。

不服そうに口を尖らせ地団駄を踏む。

「わたしの訊いてることにちゃんと答えてよ！　何度も手間をかけさせないで！」

「まあまあ落ち着いて」

しかしそれも那智の前では無効力だった。穏やかに事を進めようとする態度をこれにより一層強めてしまった。

つまり子ども扱いされているということだ。それに気づいた彼女はますます焦燥の色を濃くして、一度だけ那智の後ろのほうを見て表情を固くした。

那智はにっこりとする。

「たしかにぼくは津々那智という名前だよ。でも呼び捨てにするのはいけないなあ。年上には」

「本人なのね？」

那智の言葉を遮って少女は訊いた。

眉間に皺を寄せる那智。

「あのね、話の腰を」

「ならいいわ。実行よ」

「『実行』って何を……」

そのとき那智は腹に違和感を感じた。まるで異物が身体に入り込んだかのような。

「か、はっ」

那智は血を吐いた。身体を半分折って咳き込む。

血は止まらない。ダラダラと流れ続けるそれに那智は呆然とした。腹には少女の錆びた包丁が刺さっている。

なんだコレは。

一瞬で那智は恐慌状態に陥った。

なんなんだなんなんだなんなんだ！　なんだコレは……！

「お見事、11番手」

地面に膝をついたそのときに、その声は背後から聞こえた。

「初めてにしては素晴らしい。2番手より何倍も才能を感じる手際だったよ。でも癩癩を起こしたのはマイナス。冷静沈着を身に染み込ませないとね」

「姐さんはいつも高笑いしながら《仕事》するじゃん。人に言う資格ないよ」

1人目の声には覚えがなかったが、2人目の声はすぐに誰かわかった。

なぜならこの声は。

「……あゆ……む……」

那智は小刻みに震えながら消えそうな力を振り絞って背後を振り返った。

2人の男女がこっちを見ている。

女のほうは長い髪を思うままに垂らし、冷たい目で那智を見つめていた。

その隣で斧を両手に持つのは、女に『2番手』と呼ばれる少年だった。

裏切られた。

那智の脳裏に浮かんだのはこの言葉であっただろう。

那智はその少年の名前をありったけの憎しみを込めて絶叫した。

「歩

ッ……」

「はいよ」

彼の弟　津々歩は、ただただ返事をした。

感情も私情も一切含まぬ返事を事務的にした。

カツと那智の頭に血が上る。流れすぎて頭がクラクラするくらいだったが、那智はそこから意地で立ち上がった。

腹に刺さった包丁を力任せに抜き取る。

「無理すんなよ、兄貴。もうすぐ死ぬんだから大人しくしてなよ」

「歩……あ、ゆむ……」

「やめてよ。ぼく、兄貴に呼び捨てにされるのが堪^{たま}らなく嫌なんだから。ああそれとね、訊かれる前に言っておく。何で兄貴を殺すのかと言つと……」

そこで歩は初めて笑った。

「それが《殺し屋》の仕事だからだよ」

「ぐ、あ」

那智は足を一步踏み出す毎に血を吐いた。憤怒に目を染め、着実に歩に近づく。

しかしやがて力尽き、倒れた。

「……姐さん」

「いいよ。最後のお別れをしてきな」

1番弟子の許しをもらった2番弟子は那智の傍らに膝^{ひざ}をついた。

「兄貴、ごめんね？」

あまりに無機質な文句を彼は口にした。

これが仕事でなかったならば、歩だつて泣けたのだ。感動のラストを飾ってやれた。

だが、どうにもこうにも現実はその甘^{うま}くないものらしい。

「あ……」

何かを言おうとした兄の口に耳を寄せる。

遺言だけは聞いてやろうという心積^{こころづ}もりだった。

「あつ……くう」

「2番手！」

火事場の馬鹿力とやらは恐ろしい。

死にかけの那智は地べたに這^はつた手で落ちていたレンガを掴み、そ

れで歩の頭を思いつきり殴った。

その勢いのまま倒れ伏す歩に1番弟子は駆け寄る。

「2番手！ 2番手！」

「どうしました!？」

隠れていた他の弟子たちが集まってくるが、1番弟子はそれどころではなかった。

2番弟子の反応がないと見るや、既に息絶えた那智の身体に刀を突き刺した。

「……………」

何度も何度も、怖いくらいの沈黙の中、1番弟子は狂ったように刺し続けた。

我慢できなくなった5番弟子が「姐さん！」と袖を掴むが振り払われる。

5番弟子は尚も追いつがった。

「姐さん！ しっかりしてください！ 2番弟子はまだ生きてます。

……………姐さん！」

「……………生きてる？」

その言葉に1番弟子の手は止まった。刀を放り投げて2番弟子の頬ほおに血で汚れた手を添える。

「2番手……………」

「ちゃんと息はしてます。頭だったので血の出る量が少し多かっただけです」

気丈に5番弟子は答えた。

他のやつらは恐れをなして役に立たない。3番弟子がいない今、しつかりしなければと震える心を鞭むちを打った。

「……………そうか……………」

1番弟子は安堵したように呟く。

「しばらく寝かせて置けば起きると思います」

「……………わかった。2番弟子を倉庫に連れていけ」

1番弟子はそれだけを言っつて自分はさっさと歩き出してしまった。

もう興味がなくなつたかのようなあつさりした態度に5番弟子は拍子抜けするが、1番弟子のすることを気にしては作業がはかどらない。

他の弟子がどこからか持つてきた担架に2番弟子を乗せ、彼らはまた、自分たちのねぐらへと歸つたのだった。

「誰？」

目を覚ました2番弟子は記憶を失っていた。

ここ数日死体の椅子いすに座つて目を閉じたままだった1番弟子は薄く目を開けた。

眼下では急遽きんぐん机やら椅子で作られたベッドで上半身を起こして辺りを見回す2番弟子の姿が見えた。

「どうした？」

ベッドの周りで狼狽うろたえる5番弟子に声をかけた。

5番弟子はまた情けない声を出す。

「2番弟子がおれのこと知らないって言うんです。どうしたら……」

「記憶喪失とは一時的なものか？」

1番弟子はすぐに話の矛先ほこひさきを15番弟子に変えた。

「たぶん2番弟子の場合はそうだと思います」と、15番弟子が答える。

さすが元医者なだけあると1番弟子は頷うなづいた。

12人の視線が自分に集まるのを感じた彼女は深々と溜息をついた。

2番手が記憶喪失となると自分で細かく喋らなくてはいけないのが億劫おっくうだった。

そついうことに慣れていないので自然と1番弟子の話す内容は簡潔なものとなる。

「仕方がないね……。2番弟子の記憶が戻るまで今回の《仕事》は一旦保留。各自待機が私についてきな」

「どこに行くんですか？」

「決まってるでしょう。津々歩の学校に入学するんだよ」

「姐さん!？」

5番弟子は耳を疑ったが、ニヒルに笑う姐さんはどうやら本気らしかった。

「可愛い転校生の登場だよ」

「恐怖ですよ……」

5番弟子は心の底からそう思った。

三章 (2)

悩みを1つ言ってもいいでしょうか 城岬初華しろみさきついかさんが口をきいてくれません。

ビンタされた例のあの日からずっとシカトされてます。

何なんでしょうか、この寂寥せきりょうかん感は。まるで飼っていた犬を目の前で車に轢ひき殺された次の日のような気分。

いや、実際にはポチが死んだところ見てないんだけどね。その前に衰弱死まじつとだったし。穏やかな最後でしたよ、ええ。13年の生涯まじつとを全う致しました。

「この式ってどうやって解く？」

そんなぼくの気持ちを全く察おろしない愚おろか者が1人いた。

歩はジロリと隣の席を睨にらむ。

皆見、介。

南回帰線みたいな名前をしているだけでも身に余るのに、更にぼくの神経を逆撫さかでするとはいい度胸どくちゆうをしている。

「その式は $2x$ で両辺を割って y を左辺に動かし、その他を右辺で整理して答えを出したら2の式に代入。値が出たら元の式に代入して、答えを出す。それから1と2の式の答えを3に代入して、元の式と3を踏まえた上で条件に従って不等式を完成させればいいんだよ。問2も問1の答えを使って方程式とグラフを書いたら、次の問3はそれらと総合させて最終的に t と q の値を導き出せばいい」

「……もう一回言ってくれない？」

「あのさあ、きみってやつはまったく……」
歩は溜息をついた。

「きみの頭脳にはガツカリだよ。そもそも何でこの式が分からないの？ たかが中3レベルでしょ？ きみ何歳？ もう中1のくせに勉強不足にもほどがあるよ」

「いやいやいや、普通の中1は中3レベルの問題を解けないだろ」

「屁理屈言わないでよ、鬱陶しい」

「おれってそこまで言われなきゃいけないほど落ちこぼれてる……？」

「さあね。ところでその問題集どうしたの？」

「気になったことを訊くと、

「優さんに貰った」

予想外の回答が返ってきた。

「あんのクソ兄貴……」

どうりで見覚えがあると思った。

介が持っているこの問題集は ぼくが兄貴の受験勉強用に作った特別製だ。算数が出来ないとかほざくから親切心で作ってやったというのに、もう放棄しやがった。

渡してまだ1週間しか経ってないぞ、高校に行く気があるのかよ。

歩は介の肩に手を置いた。

「介、おまえは落ちこぼれなんかじゃない。自信を持って」

「本当か!?!」

勢い込んで聞いてくる介。

ぼくは勘違いしていた。兄貴に比べたらコイツのほうが遥かに可愛く思える。

「うん。本物の落ちこぼれは あのクソ兄貴だよ。ぼくに楯突くなんて生意気だね。今度は頭まで埋めてやるうかな」

「あ、歩?」

介は歩を呼ぶが、ギラギラと目を光らせた彼は聞いていなかった。

「ブツ殺す」

「歩さーん?」

その日の津々家の住居からは、絶え間ない絶叫が響いたという。

四章 (1)

別に優兄貴のことは嫌いじゃない。

頭は悪いし要領も悪いし家事仕事は一切できないし。でもそれでも兄貴は唯一の兄弟だった。

1番上と2番目の兄貴みたいに半分しか血が繋がってないなんてこととはなくて、両親とも同じの兄貴。親父はよっぽど運がないのか、母親を2人とも亡くしたけど相変わらず元気だった。たぶん空元気な部分もあると思うけど、それでも息子たちが4人とも健康でいてさえくれればいいとか思ってたんだと思う。でも親父は本当に運がない男だった。

2番目の息子は誰かに殺された。

自宅から何mも離れていない所で、原形すら留めていない状態で発見された。そのときの親父の取り乱し様は尋常ではなかったという立ち会っていた優兄貴にはどうすることもできなかった。

ぼくはその4日後に道端に倒れているのを秋良兄貴に保護された。実はその前に一度目を覚ましたような記憶があるが、夢なのか現実なのか判断できないので誰にも言っていない。

ぼくは行方不明だったらしかった。警察は犯人を捜査中。ぼくはしばらくの病院生活を余儀なくされた。

親父は3ヶ月過ぎた今も正気に戻らない。一日中無意義に過ごしたかと思うと突然外に飛び出したりする。もうぼくらの手には負えないので、ここしばらくは祖父母の家に預けている。

話を優兄貴に戻そう。

優兄貴は一言で言えばいい人だ。面倒見はいいし気さくだし、優しい。弟から見ればバカ兄貴だが、1人の人間として見るならまさにイイヒトだった。だからいろいろと不満はあるけど尊敬はしていた。

でも。ぼくも親父の遺伝なのか、相当に運が悪いらしい。優兄貴は、ぼくの目の前で殺された。

300枚もプリントを刷るのは資源の無駄遣いなのではないかと思いつつ、歩は先生に頼まれた冬休み用の宿題プリントをせっせと運んでいた。

せっかくの昼休みだというのに職員室で休んでいる教師をからかつてやろうと思つたのがいけなかった。国語の先生に捕まり、あえなく御用。ペナルティとしておよそ300枚のプリントの山を介と一緒に運んでいた。

「ねえねえ、歩くん。どうしておれは250枚でテーマは50枚なのかな？」

2階の廊下を歩いているときに介は言った。

「何を当たり前のことを言ってるの？ それはきみが大馬鹿者だからに決まってるでしょ。くだらないことでぼくの体力を消耗させないでよね」

「どうしておまえって人間はそんなふうに出来上がったんだろつな。おれみたいに素直な少年になってみようとは思わない？」

「きみの素直さには完敗だけど、その神をも畏れぬ口の利き方は見習いたくないね」

「おまえは何様だ」

「お子様の俺様だ」

なんとなくどこかで言ったような台詞だと思つたが、しかしぼくの記憶力は半端なものではないので曖昧模糊というのなら、たぶん夢の中で言ったのだからと推測する。

「おれはおまえが大嫌いだ」

「ぼくはきみが好きだけどね」

本音では初華さんに言いたかつたのだが、ここには介しかいないので致し方ない。

練習台になつてもらつたことにした。

「ぼくはいつもきみのことを見ていたよ。きみと出会つた日のことは忘れない。あれはある晴れた火曜日のことだった。きみは青い傘

をさし、優雅にぼくの前を通り過ぎたんだ。『あら、こんにちは』
と言いながらね。その美声には惚れ惚れした。その日からぼくはき
みの虜ひんさ。毎日毎日きみを視線で追いかけて後ろから追いかけて電柱の
影から見守り……まるでぼくは恋のボディガード」

「やめえい!!」

まだ半分も言い終わってないのに、空気を読まない親友はぼくの告
白文を拒否した。

ゼイゼイと荒い息をしている。風邪か？

「どうしたんだ、介。顔が真っ青だぞ」

「おまえは恋する男子ではなあああああい!! ただのストーカー
じゃい! おれは聞いてて鳥肌が立った!」

「だったら聞かなきゃいいのに」

「勝手に喋り始めたのは」

「あ。兄貴だ」

「聞けよ!」

介が恒例の意味不明なトークを始めたので、スルーして向こうから
走ってきた優兄貴ゆうけいに手を振った。

兄貴はニコニコとしながらこっちに近づいてきた。

「……………」

「うおっほ」

足を引つ掛けてやった。

「あ〜ゆ〜む〜」

「兄貴は相変わらず運動神経悪いね。普通じょうず躓すくのはあっても転ぶの
は極稀ごくまれだと思っただ。これは一種の才能だね」

倒れた兄貴を助け起こしながら歩は絶賛した。これだから兄貴イジ
りはやめられないのだ。面白すぎる。

「どうしたの兄貴。お連れの人たちは?」

兄貴はなぜだか人望があるので周りにはいつもも人がいる。

そんなに好きならホモになればいいのと思うほど友達が多い。だ
から1人になる機会はほとんどないのに、今は独りぼっちだった。

「撒まいてきた」

兄貴は笑顔のまま言った。

もしかしたら遂ついにに見捨てられたのかと思ったが予想が外れて残念だ。

「何で？」

「手紙貰もらったから」

「何の？」

「ラブレターか果たし状」

「誰から？」

「わかんない」

「いつ？」

「今日」

「可能性は？」

「果たし状の可能性大」

「大丈夫？」

「たぶん」

「……ふむ」

大丈夫ではなさそうだった。

ちなみに何度も言うが兄貴はバカだ。だからバカにはバカに合わせた質問の仕方をしなければならぬ。短く要点を押さえ、自分の知りたい情報を聞き出さなければならぬ。すると今のような質問形態になるのだった。悪あしからず。

「その手紙見せて」

「ほい」

兄貴はズボンのポケットからグチャグチャの手紙を出した。

このずぼらな性格も何とかしてほしいものだ。

『サンジ ニ オクジヨウ ニ コイ』

手紙にはそう書いてあった。

「……。。いつぞやの怪文書じゃないか」

「え？ 『3時に屋上に来い』のどこが？」

「3時に屋上に来い？ ……なるほど」

歩は生まれて初めて自分の兄を素晴らしいと思った。

「兄貴って秘めたる力が眠ってるんだね。ぼくは感心したよ」

「えっへん」

「史上最強のバカはおまえらだ」

「黙れ介」

我らが兄貴をバカ呼ばわりするなんて……とうとう頭がイカれたらしい。

歩は無礼な介を黙らせて、偉大なる兄を恭しく見送った。

「行ってらっしゃいませ」

「おう」

このときの兄貴はとてつもなくカッコ良く見えた。目の錯覚だろうけど。

「さてと」

歩はそんな兄の姿が見えなくなつてから、介のプリントの上に自分のプリントを置くとふいに教室とは反対方向に歩き出した。

「お、おい！」

「ん？ ああ。そのプリント、頼んだよ。ぼくには重要な任務があるんだから」

「おい、歩！」

介がもう一度呼んだが、歩が振り返ることはなかった。

こうなつてはもう言う通りにしなければなるまい。

「マジかよ……」

300枚の紙は相当重かった。絶対に明日には筋肉痛になっている。

「コレ運んで早く追いつかねえと……」

介は廊下を全力疾走しながら独り言を呟いた。

「おれが姐さんに怒られちまう……！」

四章 (2)

『重要な任務』とは、兄貴の護衛だった。

もし例の手紙がラブレターならいいが、果たし状だった場合100%の確率で兄貴は負ける。

負けるというより完敗だ。

そしてありえないことに、兄貴は自分のことをそんなに弱くないと思っ
ているらしかった。そんなに弱くないどころじゃない。相当弱
いんだと理解するのには何年かかるんだろう。

かれこれ10年以上は説得を続けているが分かってもらえたふうで
はない。だから今回のように単独行動に走るのだ。

兄貴を陰ながら守るのも弟の役目。今回だけではなく物心ついたと
きからぼくはそういうポジションにいた。

健気けんけいだぞ、ぼく。

自分で自分を励ましながら、歩は優の後を追った。

ストーカーまがいの行為ならお手の物だ。

それにしても……

「歩くの遅い……」

兄貴め、わざとやっているのではないかと思うほど歩く速度が遅い。
常人の半分くらいのスピードでのんびりと歩いている。

そして時々窓の外を見て立ち止まるのだから始末におえない。約束
の時間は3時なのに何で3時間前から移動を始めるのかと疑問に思
っていたが、そういえばこの人はのろまだった。

いわゆるヤンキー歩きで外の小鳥を眺める兄貴 何だかいけない
ものを見てしまった気分だ。

たぶん授業を休みたいっていうのもあるんだろうけど。

「……あ」

やっと歩き始めた。どうしようもない兄だ。

学校に登校する時間もやけに早いと思ったら、大方どこかで寄り道

でもしてるんだろ。朝早くからナンパしてるのかもしれない隣家のお姉さんを。片思いし続けて早8年。うぶな兄貴だ。兄貴はのろのろと屋上への階段を昇り、ふと振り返った。咄嗟に姿を隠すべく。

悟られるわけにはいくまい。知ったらきつと兄貴は自尊心をいたく傷つけられる。シヨックで引きこもりになるかもしれない。それだけは阻止しないと。

引きこもりになるのは小学生の頃のぼくだけで充分だ。とてもつらかった。ようやく部屋から出て親父と兄貴たちの餓死未遂状態を見たときは。

何なんだろうこの人たちは。もしかしてご飯を作れないのか？

その答えにたどり着いた時、そら恐ろしくなっておちおち引きこもっているわけにもいかなかった。彼らの生存権はぼくが握っているようなものだった。

いったい、ぼくが生まれるまでどうやって生活していたんだとも思ったが、そういえば母親はぼくが8歳の時まで生きていた。

ぼくが一通りの料理を覚えたのは7歳の頃。ギリギリ間に合ったと言っべきか。

兄貴は階段を昇りきりドアに手をかけた。

只今の時刻は2時45分。

恐るべきタイムである。

ギイという軋んだ音と共にドアが開く。兄貴はその射し込んだ光の中に消えた。

ぼくもその後を追おうとしたが、ドアを開ける直前に足を止め、右手にあるもう1つの小さなドアのほうを開けた。

このドアは屋上へと続く本来の扉で、兄貴が開けたほうは後からつけたものだ。もともとのドアが老朽化して危ないということで新設されたのだ。それに同じドアから出ていったら兄貴にバレてしまう。それだけは回避しなければならぬ。

歩はドアを開けて左にある給水タンクの上に登った。カエルみたい

な格好で兄貴の姿を探す。

兄貴を呼び出した相手はどうやらもう待っていたらしい。

兄貴の身体で相手の顔は見えないが、やはりあの手紙は果たし状ではなくラブレターだったみたいだった。相手は女だった。

風に靡く長い髪と制服でそれを確認する。ぼくからは兄貴の背中しか見えない。

2人は二三言葉を交わしお互いに近づいた。

歩は胸を撫で下ろす。

どうやらぼくの出番はないみたいなので邪魔者は消えとしよう。

頑張れよ、兄貴。

自分の兄に春が訪れたことを喜びつつ、歩はタンクから降りようと2人に背を向けた。

「がっ……」

そのときだった。

ちようどそのとき、とても嫌な音が耳に入った。

まるで血を吐くかのような断末魔のような、それ。

歩はその音をよく知っていた。耳慣れたその音は人が死ぬとき

の予兆だ。

ゆっくりとした動作で歩は振り返る。首だけが自分の意思では動かせないもののように、鈍い動きでまわった。

「あに、き……?」

口も思うように動かない。

頭の中は熱湯を注ぎ込まれたかのように熱かった。

ようやく視界に入った兄貴 その身体は、ゆっくり倒れた。

わかっていた。

今からでは間に合わない。兄貴は助からない。

だって、だって兄貴は 姐さんに殺られたんだから。

「あ……」

一瞬間の力が抜けた隙に一気に歩は転がり落ちた。身体は勝手に受け身を取る。

条件反射だ。意識する必要すらない。身体に染み込んだそれは《師匠》の悪癖。

本能を研ぎ澄ませたが故に特化した身体能力。

ぼくは、津々歩は 《巳巳巳巳》の殺し屋だ。

歩はフラフラと立ち上がる。

夢遊病者のように頼りない足取りで《彼女》に近づく。

「姐さん」

「遅かったね、2番手」

血まみれの《彼女は》言った。

紺のブレザー、真っ白なブラウス、緑のネクタイ、黒のハイソックス。

長い髪は、今日はそのまま垂らして。

ぼくの好きな女の子、城岬初華 姐さんは、笑った。

「姐さんが……早すぎるんだよ」

「いいや。2番手が待たせるからいけない」

歩は更に近づき、1番弟子の手を掴んだ。

「姐さんは最悪だね」

そして真正面から1番弟子を見つめてこう言った。

「殺したいくらいに」

それを聞いた姐さんはもう一度笑う。

「ははっ。やってみな」

「嫌だよ。ぼくは姐さんに勝てた例がないんだから」

「私が仕事以外で勝てるのは2番弟子だけだ。《巳巳巳巳》最強の

2番弟子だけ」

「……………」

そのとき姐さんは笑って、ぼくは何も言わなかった。

四章 (3)

やばい……ヤバイヤバイブアイ!!

どうしよう歩を見失った。どうする……どうする、おれ!

姐さんに殺される……絶対によくても拷問室行きだ……。

『あれ? そういえば5番手って2番手と同じ学校だったよね。だったら見張つといて。勝手な行動されないように』

ねーえさーん! どうしてあなたはそんなことを覚えてんだ、忘れてままだといてくださいよそこは。

歩とは幼馴染みだからいつかはバレることだけど、できれば気づいてほしくなかった。

もう嫌だ。歩関係は必ずおれが不幸になる。

おれは全然悪くないのにどつかれたり殴られたり蹴られたりする。

ありえねえ。おれの人生ありえねえことになってる。

第一おれは《いえしき己己己》なんかに弟子入りするつもりはなかった。

ただ小学生のときに『あーゆむくーん。遊びましょー』って言ったら連れてこられただけなんだ。5番弟子とかいう番号ついてるけど、おれはそんなに人殺しをしたいわけじゃない。

《いえしき師匠》みたいに殺し屋から殺人鬼になったわけじゃねえんだ。

小学生から殺し屋になっただけなんだ。

見事なほどの被害者っぷりだ。おれは悪くない。悪いのは歩だ。

お互い同い年なのに1番弟子のことを『姐さん』とか呼んで、おれ

は姐さんが怖いから姐さんに敬語を使って、数年の間に《いえしき己己己》

はデカくなって、《いえしき師匠》は恨まれ過ぎて別の殺し屋集団に殺さ

れて、歩は記憶なくして……わお。波乱万丈だぜ。

だいたい姐さんが転校してまで歩に構う理由が分からない。

『でも姐さんの中学ってとにかくひがし兎角東中ですよ。おれらのとにかくにし兎角西中は遠

いんじゃないんですか?』

『大丈夫。家ならたくさんあるから』

『……………ういつす』

中学生のくせにませてやがる。家ならたくさんあるから……………一度は言ってみたい言葉だ。

「どうすっかな……………」

只今の時刻、2時45分。おそらくあいつらは屋上にいるんだろうけど、歩のことだから予想外の行動に出ているもおかしくない。

だからそれを想定して、こうして中庭で兎と戯れているのだ。

中庭には大きな兎小屋があつて、20匹くらいの兎が跳ねている。

チャッピーと呼ばれる今年生まればかりの兎がおれの太股の上で今スリープタイムだ。こいつも起こしたら消しゴムのカスを投げるのだろうか。

それは嫌だ。

だからチャッピーを起こさないようにおれもこの場からは動かないことにする。

別に屋上に行きたくないからじゃない。ただ面倒なことに巻き込まれたくないだけだ。

どうせ上では歩の兄貴が殺されてるところだろう。

たしかこれで2人目か。

その2人の兄貴が何をやらかしたのかは知らないが、おそらくもう歩の兄弟が殺されることはない。

《津々歩の親しい人間を全て排除せよ》というのが依頼内容。

もちろん《已巳巳己》のメンバー以外で、だが。

歩に恋したがために殺されるはめになった『14歳の中学生（兎角西中学2年・女）』は不憫だったが仕方がない。これがおれたちの仕事だ。

まあ、今回の依頼主の要求は全て満たした。これにて仕事は終了だ。たぶんまだたくさん依頼書はあるのだろうけど、一応今日から休暇になる。本来の学生としての本分をエンジョイできるというわけだ。「学生でいるより殺し屋のほうが断然面白いけどな」

介はチャッピーを静かに降ろし関節をポキポキ鳴らしながら、

「後始末でもしてくるか」と渋々学校を早退した。

歩の兄弟は4人だ。2人死んで、あと1人が足りない。

津々秋良^{つづあき}。警察官の長男。

別に仕事じゃないけどケジメはつけていただかなきゃ《巳巳巳巳》^{いへしき}の品格を落としてしまう。

……あー……そういえばさっき『おそらくもう歩の兄弟が殺されることはない』とか自信満々に言っちゃったよ。嘘になるじゃん。

……うん。まーいいや。面倒だし。ただおれが最後に一言だけ言いたいのはさ、『おれにも働かせる』ってこと。一応《師匠》の5番弟子であるわけだし。

望んでなかったわけではないけれど 残念ながらおれは、骨の髄まで《殺し屋》だ。

『殺さなきゃ、殺される』

《師匠》からおれが学んだことは、それだけだ。

五章 (1)

「2番手は《已^い已^え已^い己^じ》の記憶だけをなくした。その他の記憶は憶えてたのに、殺し屋だったことだけを忘れた。だから5番手は知らなくても皆見介は憶えてた。私を見ても城岬^{しろみさき}初華^{ついか}。1番手にはならなかった。私は3ヶ月待ったよ。2番手が記憶を取り戻すのを3ヶ月も待った。でもね、限界ってもんがあるの。依頼書は山となつて積み重なつてるし、それを12人でこなすのは無理があつた。だから裏の手を使つて2番手に思い出してもらおうとした。だけど2番手は何回呼び出しても、ここには来ない。依頼書はなくならない。だから待つのをやめた。最初に女を1人殺して、次に津々優を殺した。……偶然つていうのは面白いね。偶然津々優についてきた2番手が偶然殺しの現場を見て偶然全てを思い出した」

淡く微笑む姐さんはまるであのときの《師匠》のようだった。

裏切り者を許したときのような、寂しげな笑顔だった。

「違うよ」

歩は首を振った。姐さんが言つてゐることは間違つていた。

風が吹きつける屋上で歩は表情を一切動かさずに言つ。

「姐さんは待ちきれなかつたんじゃない。これ以上待つ気がなかつたんだ。何年姐さんと一緒にいると思つてるの？ 姐さんは3ヶ月だけ我慢する。何があつたとしても3ヶ月経つたら依頼を遂行する。それに、姐さんがいるのに『無理がある』なんてことはありえない。姐さんは嘘をついてる。何を隠してるの？ ぼくに何を知られたくない？」

「変な理屈だよ、2番手。私は何も隠してない。嘘もついて
「姐さん！」

2番弟子はそこで、生まれて初めて1番弟子に対して怒鳴つた。

「何で姐さんは嘘ばかり言つなの？ ぼくが ぼくが《今回の依頼主は姐さんだ》ってことを知らないとも思つてる！？」 兄貴を

2人も殺して、3ヶ月前ぼくに告白した先輩を殺してほしいって頼んだのを2番弟子であるぼくが知らないとても!？」

「に、2番……」

「ぼくは全部わかってた! 姐さんが本当はぼくの家族全員を殺そうとしてたことも、姐さんがぼくの大切な人たちを殺したことも!

でもぼくはそれを許した。覚悟を決めたんだ。それなのに姐さんは逃げた。ぼくが今全てを思い出して姐さんに最後の許しを請う機会をあげたっていうのに、姐さんはぼくから逃げた。ふざけるな! 甘えたままでもいいと思うな、言いたいことがあるなら姐さんも覚悟を決めろ! 仮にも《師匠》の1番弟子だろうが!」

「2番手にはわからないんだよ! 2番手は何もわかってない。感情の起伏がない空っぽの2番手には何も」

「だったら姐さんには何が分かってるっていうんだ!」

「……………」

姐さんの言葉を遮って言うと、姐さんは唇を噛みしめて俯いた。

2番弟子は1番弟子の手を取った。

1番弟子の表情は2番弟子からは見えない。でも姐さんの気持ちなら痛いほどわかった。

「いい? 姐さんの表現の仕方は間違ってる。独占欲が強いことを悪いことだなんてぼくは言わない。姐さんに好かれることはぼくの幸せだ。でも勘違いしちゃいけない。ぼくが姐さんを1番大切に思っている、姐さんがぼくの大切な人たちを傷つけていいことにはならない。ぼくのはぼくのものなんだ。姐さんのものじゃない。なくしていいものだなんて、ぼくは思えない」

姐さんは、泣いていた。

溢れた涙を2番弟子は指で拭く。

姐さんのことは好きだ。でももしかしたら同じようなことを繰り返すようならぼくは姐さんの敵になる。

姐さんの罪は2番弟子のぼくが償わなければなるまい。

2番弟子はそっと1番弟子の肩を抱く。

おそらく姐さんはもう大丈夫だろう。同じ失敗を繰り返すことはない。

でもまだ、ぼくにはやるものが残っている。

アレを片かたさなければ終わったとは言えない。

『最後までやらなきゃ終わらないよ、2番弟子』

《師匠》の指導は的確だった。たしかにこのままじゃ終われない。

「教えてくれるかな、姐さん。《師匠》が最後にやり残した仕事の

『対象者』を」

囁ささやく2番弟子は　まさしく《殺し屋》だった。

五章 (2)

ぼくの兄貴はろくでなしだ。

たとえ警官をやっても、根性がねじ曲がっていることには変わらない。

警察官になったのは本性を隠すため。隠れ蓑をまとった兄貴は立派な犯罪者だ。

なぜなら 《巳巳巳巳》の3番弟子と云えば、秋良兄貴をおいて他にはいないから。

津々秋良。ぼくの兄貴。

あるとき33番弟子は3番弟子と42弟子が『出張』だと言った。

考えてみればおかしな回答だ。《巳巳巳巳》に出張なんてものはない。

そして42番弟子はもう死んでいる。

42番弟子 『14歳の中学生(兎角西中学2年・女)』と言ったほうが分かりやすいか。

まったく、姐さんには困ったものだ。あれほど《師匠》が仲間だけは仕事であつても殺すなつて言っていたのに躊躇いもなく殺してしまった。まあ……42番弟子も裏切り者だったから別にいいんだけど。

《師匠》も裏切り者を全部殺してから死ねばいいものを。死ぬときまで中途半端な人だ。

「歩……」

「やあ、お巡りさん」

裏切りは結束の固い《巳巳巳巳》の中でもたびたびあつた。そのたびに《師匠》は暴れまわつたものだ。

『もう疲れた』

あつさりとその一言で理由を述べた《師匠》。

やっぱりあの人は殺し屋になんかなるべきじゃなかった。途中で諦

めるような人、殺し屋には向いてない。

2番弟子は自分の身長よりも大きな斧を手に持っていた。いつもの斧の倍以上はある特注品だ。それこそ量産できる代物ではない。

「なんだ……介も来てたのか」

「いちや悪いかよ」

「別に」

既に傷だらけの2人を2番弟子はつまらなそうに見た。姐さんはいとこる見せるチャンスだったのに。

「姐さんはそこで見てて。役に立たないから」

姐さんをその辺に座らせながらぼくは言った。

「おまえ、えげつねえな」

「介ほどじゃないよ。だいたい何でそんなに苦戦してるの？ 介ってそんなに弱かった？」

「3番弟子相手に苦戦しないほうがおかしい」

「はッ」

2番弟子は鼻で笑う。

「だから言ってるでしょ。鍛練が足りないって。やる気あるの？」

「そんなもん弟子入りしたときからねえよ」

「弱虫め」

だったら殺し屋やめればいいのにと思いつつ、2番弟子は斧を構えた。

でかい斧は失敗だったかな……部屋の中じゃ使いにくい。

見慣れた間取りなのは自宅だからだ。

兄貴も面倒な所にいたものだ。殺した後の片付けが面倒になるじゃないか。

二階の自室にいた兄貴は介に見つかって慌ててバットで応戦したらしい。部屋の中がかなり荒れていた。

「訊きたいんだけど、兄貴は別の殺し屋に寝返ったの？ それとも3番弟子と4番弟子と徒党を組んで反逆しただけ？」

「寝返ったんだ」

兄貴は荒い息で答えた。

「なるほどなるほど」

それは困った。

「《師匠》を殺したのも兄貴？」

「それは33番だ。あいつは元々《茉寄》まつよりの人間だ」

「《茉寄》？ あの少人数弱小隊で《巳巳己》いえしきの前身の？」

「そつだ」

「ふーん」

2番弟子は5番弟子を見る。

介は分かつてるとでも言うように片手を挙げた。

「もう殺してきた」

「偉い偉い。どうしても33番弟子の素性だけがわからなくてね。

よかつたよ、記憶をなくす前に指示しておいて」

2番弟子の言葉に秋良は目を見開いた。

「まさか全て知つた上で……」

「当たり前だよ。《師匠》が死にたがつてたとは露知らなかったか

ら対応が遅れたけど、これで決着がつきそつだ」

2番弟子は右から左手に斧を持ち変えた。

「金の斧と銀の斧、どっちがいい？」

「普通の斧！」

たぶん33番弟子から聞いたのだろう 秋良の即答に2番弟子は

ニヤリとした。

「残念。ぼくが今持っているこの斧が 《普通の斧》だよ」

振り上げた斧は重力によって重さを増し、踵かかとを返した兄貴の背を容

赦なく斬りつけた。ミシ……という骨が割れる音が耳に入る。

「うわ……」

5番弟子が顔をしかめるが知つたことではない。

斧は兄貴の身体を貫通して床に刺さっていた。

「題名をつけるなら『真つ二つ』だね」

ぼくの率直な感想に介は呆れた顔をした。

「あーあ。片付け、手伝わないからな」

「わかってるよ。手伝うんじゃないなくて全部やってくれるんでしょ？」

「おれ関係なくね？」

疲れたかのように言う介の背中を蹴り飛ばして兄貴とハグさせてやった。

「そんじゃよろしく」

「あゝゆゝむゝっ!!」

「さすがのぼくだって兄貴の死体を自分でゴミ箱に捨てたくはないからね」

「……そうか」

「そつだ」

なんとなく分かり合えたぼくらはガツチリと握手をした。

「……なあってことになるわけねえだろうがバカ歩があっ！」

「げっ」

そのまま引つ張られてぼくも兄貴と抱擁を交わした。血がビツチャリで気持ち悪い。

「ワハハハハ。初めて勝ったぞあうぐう」

斧の柄で介の頭を力の限り小突いてやった。頭を抱えて転がり回る介。

生意気だ。一度死ね。

「テメー……いいかげん」

「介」

2番弟子は寝転がって天井を見ながら呼びかけた。

「……何だよ」

いつもと違う様子に5番弟子はまじまじと2番弟子の顔を見る。

「兄貴は、どこで間違えたんだらうね」

「……」

言葉に詰まったら5番弟子に構わず2番弟子は続ける。

「きつとぼくを弟に持ったときからだらうね。兄貴の人生が狂った

のは」

「歩……」

血をすくって手首を流れ落ちる様をジッと見つめた。

ぼくに関わった人たちは、こうやってじっくりと気づかぬうちに堕ちていくんだ。

堕ちている実感もないままに。

「狂った殺し屋を弟に持ったときから、兄貴たちの運命は決まっていたんだ」

2番弟子はニツコリとした。

血の海の中で1人、上辺うわへだけの微笑みを浮かべる。

「可哀想に」

「……………」

介は口をつぐみ、

「私に気に入られた2番手ほどじゃないよ」

姐さんは少し的外れなことを言った。

ぼくは全然『可哀想』なんかじゃない。だって 全部ぼくが悪いんだから。

「帰ろ、2番手。明日も学校だよ」

「はいよ」

姐さんの隣を歩きながらぼくは思う。

やっぱり姐さんの隣が1番いい。

津々歩でいるより《2番手》でいるほうが断然いい、と。

それはぼくの我儘わがままでもあつたし、たぶん姐さんの望んでいたことでもあつた。

これから《已い己え己き》は変わる。《師匠》の代とは違う殺し屋になるだろう。それでもそこに姐さんがいるなら、ぼくの居場所はそこにある。

それだけは確たしかだった。

終章

親友を殴るときの気持ちは誰でも心苦しいものだ。

ぼくだって殴りたくて殴っているのではない。

介が殴りたくなるようなことをするから殴るのだ。『わーい、おれを殴って〜』と言わんばかりに腹立つことをヤツがするから悪いのだ。

秋良兄貴が死んだ次の日。

ちよつと話があつたのでぼくは介を校舎裏に呼び出した。

『まさかとは思っただけどさ　　《茉寄》の連中、皆殺しにしてき

たよね?』

『え? 何で?』

『……え? 33番弟子だけを消してきたの?』

『おう』

『……』

『ぐはっ』

そこでパンチがいい具合にヒットしましたとさ。

それで今は地面とキスする変態の頭を踏みにじっている最中なのです。

「ねえバカ? バカでしょきみ。どうして最低限のことができないの? 簡単でしょ、ちやちやつと50人くらい殺れるよね。3分クッキングより簡単に終了するでしょ。なんなの、何がそんなふうなきみを怠惰な人間にしたのさ。ぼくがそういう怠け者が大っ嫌いなのを知ってて、あえてそういう嫌がらせをしてる? 泣いちゃうよ? ナイーブなぼくは介が情けなさ過ぎて泣いちゃうよ?」

「死ぬ……死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ……」

「死ぬばいいのに。いくら番号順に強さが決まってるわけじゃないって言ってもね、実戦に出た人間と練習だけの人間とじゃ明らかに違いが出るんだから。一応《巳巳巳巳》の5番弟子と言えば『殺人

鬼に1番近い殺し屋』って言われてるんだよ？ それにきみが1番人を殺してる数が多いんだからしっかりしなよ。《師匠》みたいに入狩りを趣味でするのはいいけどね、仕事はきっちりこなしてくださいませってぼくは思うよ」

「おまえがおれより強くなかったら殺してやるのに……」

「ぼくは強くなんかないよ」

歩は優しく微笑んだ。

「ぼくは『最強』なんだよ」

「最低の間違いだろ」

そつぽを向く介は悔しがっているようだった。

わざわざ慰めはしない。そのまんま放置だ。

「あ。ぼく介に謝らなきゃいけないことがあるんだ」

「なに」

「『サンジ ニ オクジヨウ ニ コイ』の手紙をきみの下駄箱に入れたのはぼくなんだ。素直に屋上に行ったら殺されそうになったんだってね。姐さんに聞いたよ」

どうやら姐さんがぼくにやろうとしてた『記憶を取り戻す』ための秘策とは、殺し合いをして無理矢理思い出させようというものだったらしい。

たしかにその状況なら思い出すかもしれないが強引すぎる。

巻き込まれた介がさすがに哀れだと思い、謝るに至ったというわけだった。

「おまえだったのか！ おれがあのとときどれだけ恐怖を感じたか！

今日こそブツ殺す！」

介はナイフを出してぼくに宣戦布告した。

しかし歩はそれ以外の方向を向いていた。

「あゝあ。タイミング悪い……」

歩の呟きが聞こえたかどうかはわからない。しかし次の瞬間の介の表情は『殺人鬼に1番近い殺し屋』の名に相応ふさわしくないものだった。「なにしてるの？」

「ね、姐さん」

介の振り向く視線の先にいたのは姐さんだった。ついてきてしまったらしい。

「ね、姐さん、これは……」

「駄目だよ姐さん。男同士の戦いに無粋な手出しは無用なんだから」

「ああ、そつか。戦いの最中だったのか。邪魔してごめん。私、先に行ってるよ」

「ありがとう」

姐さんは割とあっさりと去ってくれた。

姐さんが絡からんでくると厄介なことになる。引いてくれて何よりだ。

「介くん」

「何かな歩くん」

「今日は斧を3本とも持ってるんだ、ぼく」

「……銅の斧とかない？」

「ないよ」

介はぼくに惨敗した。

もちろん殺してはいないけど、介は傷だらけでぼくは無傷。

無様だ。介は悔し泣なみきしていた。

だからそうならないように何度も言ったのになあ ぼくに関わる

と、きみは不幸になるってこと。

「明日《まつより茉寄》を潰つぶしてきてよね」

「うー……」

介に指示して、ぼくは姐さんのもとへと急いだ。

「姐さん！」

予想通り姐さんはそんなに離れていない所でぼくを待っていた。

姐さんは振り向く。

「遅かったね、2番手」

「姐さんが早すぎるんだよ」

「……そつかもね」

「そつだよ」

《巳巳巳巳》^{いえしき}の最弱と最強は笑い合った。

純粹無垢な笑顔を振りまいて今日も彼らは人を殺す。

そこに躊躇^{ためら}いや惑いはなかった。

「行こうか、2番手」

「はいよ」

終章（後書き）

はじめまして、穩田と申します。執筆歴がトータルで1年にも満たない半熟者です。大した伏線も張れず、文章力も下の下、キャラも曖昧、描写が少ない、ダラダラとした話の流れ、つまらないラスト…… 自覚してます。ひとえに筆者の力不足です。これから精進していきますので、よろしく願います。一応これでこの物語は幕引きですが、もしまた『最弱の殺し屋』の続編を性懲りもなく書き始めましたら、生暖かい目で見守ってやってください。次は『塾の幽霊（仮題）』の連載をしたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5843h/>

最弱の殺し屋

2010年10月28日07時55分発行